

登米市観光物産大博覧会にて

去る 10 月 1 日・2 日の二日間、私たち丸岡ゼミ生は同じ経営学部の清水ゼミ生とともに、登米市観光物産大博覧会に参加しました。

この日、ここには、登米市の特産物や郷土料理、フリーマーケットなどの様々なブースがあり、多くの人で賑わっていました。

私たちは、会場内のブースを使用させていただき、ゼミで制作したこの『石巻復興 NEWS』の 1 号から 3 号を配布する他、自分達の震災当時の状況や石巻の現状についてお客さんと話しをしました。

その中でも登米に住んでいる方二人に貴重なお話を伺うことができました。

お一人は登米市に住む 50 代の男性の方でした。

今回の震災を体験し自ら地震について調べたというこの男性は、昭和 8 年に発生した昭和三陸地震により、宮城県沿岸部が大津波に襲われた時、どこまで津波がやってきたのか後世にも伝わるよう、碑が建てられたことを教えてくれました。

しかし、今回津波によって、多くの被害や死者・行方不明者が多数出たことに対し、とても落胆した様子でした。このような出来事が起きてしまったのは以前起きた津波からの教訓が、時間が過ぎていくことにより人々の記憶から薄れていき、いつからか忘れ去られてしまったからではないか、と残念そうに話していました。

私たちは昭和 8 年のことは知りませんでしたが、東日本大震災の悲惨さと教訓を後世まで伝えなければならぬと思いました。

そして、もう二度とこのようなことが起こらないようにしなければならぬと感じました。



私たちのブースに布施孝尚登米市長も



屋外ステージ

もう一人は南三陸町で被災にした 50 代の女性の方で、体育館の入口に店を開いていました。彼女は、ブレスレットやティッシュカバーなどの小物を並べていました。これらの品物は仮設住宅に住む被災した 60 歳以上の方々の手作りだそうです。

その商品の一つに「TEN」と書かれた T シャツが販売されてありました。TEN の意味が気になった私たちは、それが何を表わしているかを聞きました。

この女性によると TEN とは、「天」のことであり、震災が起きたのに私たちは生きていられたのは、天からもらったご縁で、天の声を聴き、被災者の方の心に灯をともし支援活動をするをお願い名づけられたものと教えていただきました。笑顔の花を咲かせ人と人、地域と地域、という点を結ぶことが、この女性たちの目標だそうです。

私たちの中にも津波の影響で被災した人がいたので、お互いに気心の知れた話ができ、皆同じく苦しい状況なのだと感じました。年配の方々がこんなにも頑張っているのに私たちは、何が出来るのだろうかと思いを改めさせられました。

他にも様々な人と会話することが出来ましたが、希望を捨てないこの女性に感動し負けてられないという気になりました。

私たちは今回この登米市観光大博覧会に参加して、震災について話をするということにしていますが、逆に私たちのブースに来てくださった方々からまた震災について多くのことを学ばせていただきました。私たちは、この話を聞いて改めて、この『石巻復興 NEWS』を通じて東日本大震災と復興の状況を多くの人に伝えていきたいと思いました。

(稲垣雅也、末永寛二、星翔太郎、横山風太、吉城翔太郎)

主なプログラム

- ☆伊達なお土産コンテスト
- ☆直売所スタンプラリー
- ☆登米市の観光 PR
- ☆新米なるほど体験
- ☆コロッケミニライブ など

石巻・女川案内

10月1日、ノンフィクションライターの神山典士(こうやまのりお)さんたちのグループが東京から被災した石巻と女川地区を視察に来ました。神山さんのグループは被災者の体験記出版のための取材をしています。

石巻出身の私(金津)は案内役として一緒にさせていただきました。

集合場所の日和山に10時ころ合流しました。まず私が被災体験を話しました。日和山からは私が住んでいた地域がちょうど見えるので、より身近に感じてもらうことができたと思います。

体験談の中で特に私が伝えたことは、津波に対しての意識が低かったことです。これは私だけではなく、私の住んでいた地域の多くの人に当てはまると思います。これまでに津波に対する訓練をしたことは一度もなく、こんなに大きな津波なんてあり得ないことだと考えていました。このような意識により、迅速な対応をとれなかったのだと思います。

日和山からの景色を眺めた後、私たちはバスに乗りました。女川までの道中、私は被災地の現状を伝えました。女川に近づくにつれ、どんどん周りの景色は変わり、ビルが基礎ごとひっくり返っていたり、地盤沈下により道路が冠水していたりと、震災から半年経った今でも悲惨な状態でした。

そして目的地の御前浜へと着きました。そこで昼食を食べた後、現地の漁師さんから話を聞きました。「震災前は銀鮭とカキの養殖をしていたが、津波によってすべてを流され、ゼロからのスタートになってしまった」とのことでした。そして「これからまた1歩ずつ歩きだすしかない」と力強い言葉をいただきました。このあと他に行くところがあるということで、神山さんたちと私はここで別れました。

今回の体験を通して印象に残ったことは、皆さんがとても真剣に聞いてくれて、気持ちを込めて伝えることができたことです。そこで私は、今の自分にできることは、一人でも多くの人に震災の体験を伝えることだと思いました。もし、またこのような機会があれば積極的に参加したいと思います。

(金津甲樹、菊池駿)



石巻専修大1号館と5号館の間にできた災害ボラセン

石巻市災害ボランティアセンター

石巻市の災害ボランティアセンターは社会福祉協議会により運営されています。

社会福祉協議会は、民間の社会福祉活動を推進することを目的とした営利を目的としない民間組織です。社協の阿部良紀さんの話によると普段は、子供、お年寄り、障害のある方をお世話する仕事をしているそうです。

社会福祉協議会は3月30日に石巻専修大学と防災協定を結ぶ予定であったため、災害が起きた時どのような行動をとればよいかあらかじめシミュレーションを行っていました。

阿部さんは、この準備のおかげで平常心を保ち地震発生時市内のファミリーレストランにいた子供に、携帯で、すぐ近くのパチンコ店の上の階に逃げるよう指示できたそうです。

事前のそなえがあったからこそ、このような適切な避難場所の指示が出せたのだと思います。

3月30日に結ぶ予定だった防災協定に想定されていたとおり、3月11日の震災発生時、まもなく「災害ボランティアセンター」を石巻専修大学に設置し、円滑にボランティアに来てくれた人たちと被災した人たちの仲介をすることができたそうです。

石巻専修大学がグラウンドがキャンプ地に、同大学野球部の雨天練習場が物資保管場所になりました。ピーク時にはこの石巻専修大学には被災者のテントが300くらいあり、約2000人のボランティアの人たちが駆け付けて、石巻市内の家の掃除などをしました。多い時では一日に100件の家を掃除したそうです。

社協は普段の私たちの暮らしではあまり縁がなく知らない人もいますが、今回のような地震があった時、私たちにとっても身近な力になることがわかりました。社協以外にも石巻の復興に大勢のボランティアの方が力を貸してくれているので、私たち地域住民も頑張らないといけないと思います。

(金野千春、工藤達也、星正太郎)

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail senshu-maruoka@inter7.jp